

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別郵便法第六二七号  
平成二十四年四月一日発行(第四百十五卷第四号)

# ホトトギス

四月号



## 俳句随想 〔三百五十八〕

汀子

虚子が俳句を「花鳥諷詠詩」と言ったことをただ風流の戯言という人が居る。それは本当の「花鳥諷詠」を理解せず、ただ表面の言葉だけを見て上辺の事しか解釈できない人がいるのには驚いた。ホトトギスで勉強している方々はそんなことはないであろうが、花鳥に代表される自然を全て包含した花鳥でなければならぬ。また、「客観写生」を狭く解釈して、景色のスケッチのようにしか理解出来ない人もある。客観写生と言っても、それを描く人の位置がはつきりしていなくてはならない。すなわち、そこには主観という描く作者が居るのであり、客観写生というといえども主観の範疇にあることに間違いない。また、十七文字という短い表現のため、何程のこととも言えないが、そこには季題に語らせるという方法があり、季題の持つ広くて深い意味が俳句の解釈を広くし、多くの事柄が伝えられるのである。

また、俳句は詩であるということを忘れてはならない。本音を語ることで内容に幅を持たせられるが、それらが余り高じると、その事柄の面白さだけが表面に強調されて余韻の少ない一句になるであろう。短い詩であるからこそ短いということを手を使って余韻の深い句を期待している。

# 旬日記 汀子

平成二十三年四月一日「俳句」へ

折りととは、心のことば花の下

四月二日 芦屋ホトギス会

百本のスイトピーとて一握り

春暁の折り捧げて偲ぶのみ

四月四日 ロイヤル俳壇

麗かな陽気に添はぬことのあり

春暁といふ定まらぬ心かな

被災地の春曙の夢ならず

蕨餅にも齒応へのありにけり

うららかな夜明け祈りの深かりし

四月七日 工業倶楽部

若草の萌えよ被災地覆ふまで

若草に恵みの雨となりぬべし

四月八日 虚子忌

花絵巻つづりたまへと災害地

花心うばはれし地に祈りあり

みちのくに花の便りの届かざる

四月九日 吉野山くつぎの旅

雨霽を空に返して花の旅

咲く花の心に添うてゆく吉野

みよし野の一割占めて花の宿

雨霽こぼさぬ数の楓の芽

どことなく花の色置く吉野山

旬日の花の盛りを待てぬ旅

点呼して一人を探す花の宿

第二句会

これ以上もう食べられぬ花の宴

咲きすすむ花とは紛れなかりけり

はかりごととは密にして臘の夜

臘月峰に沈めて吉野山

咲き進むこれより花の吉野山

通ひ馴れたるみよしの花の宿

春宵を更かすも親しかりし宿

第三句会

先づ桜より明けてゆく吉野山

黄蘗林きは立ててゐる朝桜

一斉に咲くと予言の当る花

刻々と朝日漲りゆく桜

み吉野の今年の花の別れかな

四月十二日 大阪倶楽部

み吉野の臘月夜を更かしけり

初桜どつと快晴たまはりし

災害の出口の見えぬ臘月

み吉野のはや帰路となる初桜

入学の未来約せし表情に

四月十二日 綿業倶楽部

桜餅食べて終りし一日かな

水音に山葵の沢の近きこと

峡の空弥生の月をかかげたる

み吉野の弥生の旅のはや帰路に

四月十四日 清交社

断れぬ稿債一つ桜草

鉢植の桜草とて身ほとりに

寄り道のついでといふも日永かな

復興の遅日の街でありしこと

書き足して足して遅日の予定表

蜂飛んでみしと気づきてよりのこと

四月十七日 下萌句会

庭に声二階に俯瞰花の客

花臘み吉野の旅終りたる

春昼の庭咲くものも散るものも

月臘脱ぎつついつか中天に

四月十九日 有恒俳句会

真夜覚めて西へ傾く臘月

菜の花の色をつづりてゆく車窓

六甲の嶺に鎮めて月臘

菜の花の色に紛れて無人駅

庭のもの咲き替りつつ臘かな

蝶飛んでゐるや落花の舞ひゐるや

四月十九日 無名会

被災地に心寄せ合ふ臘かな

咲いて知る赤がちなりしチューリップ

臘夜にかりかき電話よりのこと

又一人幽明異にせし臘

帰路は目に飛び込んで来し月臘

四月二十日 夏潮句会

椿落つ音の静寂を共有す

うららかといふほかはなき午後となる

水音の消えて消えざる子の視線

風船の消えて消えざる庭春惜む

咲き替はり咲き増ゆる庭春惜む

チューリップ赤にはじまる目の迷ひ

チューリップ日向の色に加はりぬ

四月二十一日 時雨句会

余震又ありて暮春の東京に

残花ともいはむ黄桜さくらいろ

滞在の米磨ぎしより暮春かな

み吉野の残花の山路なりしかと

四月二十三日 句会と講演の会

この色は窓辺が似合ふシクラメン

手をかけて命の証シクラメン

この降りは春の嵐といふべきや

四月二十八日 きつね句会

風荒れしひと日に夏を近づけし

夏近き実感旅の半ばなる

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年四月四日 はせを句会

父と子と聖霊の御名によりて春  
墓前には赤いらふそくてふ虚子忌  
温む水とは万物を持ち去りて

四月四日 カトリック新聞選者吟

蟻穴を出づれば神の英知かな

四月五日 愛知ホトギス研修会

花ミモザ要としたる広さかな  
亀鳴くや万博跡地てふ広さ  
水の景芽柳の景石の景  
万博の時空引き寄せ庭うらら  
太陽に突つ込んでゆく揚雲雀

四月七日 蕉心会

地震の地の友を案じて花の句座  
東京に夜が戻りて月朧  
もう花を零す狼籍者の風  
あの人許へこの花届けたく  
蝌蚪群れて飛蚊症めく視界かな  
これ全部蛙になつてどうすんの  
筈の伸びぬばならぬ丈であり

四月八日 虚子忌

日本の明日を信じて虚子祀る  
一片の落花を肩に忌日人

四月九日 吉野つるぎの旅

みよし野の花の明日を約す二分  
ハイテクに閉ぢ込められし人うらら  
花人の下山してゆく虚ろかな  
みよし野に花の咲く明日があるさ  
くつろぎの旅は虚子忌を終へてより

一杯に花冷解いてをりにけり  
姉居らぬ高濱三姉妹うらら  
八咫鳥酌めば反省会うらら  
日に解けゆく朝桜あさざくら  
桜にはやつぱり青空が似合ふ

四月十一日 「俳句研究」夏の作品集

ラベンダー北の大地の落着きに  
しつとりと茅花流しの帰宅かな  
はんぎきに出会うてよりの山路かな  
夕菅に湖の風来て止まる  
海の日や海に消えたる幾柱

四月十一日 朝日カルチャー若草句会

八重桜吉野の山気濃きところ  
貼りつけていそぎんちやくは波まかせ  
子等見付け触れていそぎんちやくの綺羅  
ぶくぶくといそぎんちやくの吹ける  
四月十二日 ケーブルテレビ「品川のチカ」収録

紡績の昔を偲ぶ街うらら

四月十四日 土筆会

春潮や神の計画てふ試練  
山葵漬買うてこれより峠越え  
落花舞ふふとあの人のことなどを

四月十七日 野分会芹屋例会

未だ揺れてゐる東京の春の闇  
風信子午後二時半の影を持ち  
僕は白君は紫ヒヤシンス  
春の闇より八つの目光りけり  
春の闇より怨めしやうらめしや

四月十七日 虚子記念文学館投句

強風に地震に遅れて春の闇

四月十九日 草木会

木々ゆらり大地ゆらゆら蝶の昼  
双蝶や心明るくなりたくて  
初蝶の黄に目の慣れて来りけり

蝶の昼日差集めてをりにけり  
木瓜の花君には棘がよく似合ふ  
梨の花咲いて稲城野目覚めゆく

四月二十一日 登嵩会

みよし野に出会ひ重ねて桜餅  
桜餅みよし野の朝解けゆく  
どこからかクラクシヨン鳴る春の宵  
春宵の宴佳人の着きてより

四月二十三日 ホトギス社句会

キャンディーズ一人逝きたる春の闇  
シクラメン聖土曜日祝ぎ色に  
春の闇聖土曜日が払ひゆく

四月二十四日 野分会東京例会

ヒヤシンス子等の興味は花より根  
東京駅コンコースてふ春の闇  
教室に色を競うてヒヤシンス  
魍魎の宴吉野の春の闇

四月二十六日 若水句会

春日傘色が躍つてをりにけり  
行春や偲ぶこと又多かりき  
忘れ霜忘れてならぬ人のこと  
春日傘佳人が差せば色生れ  
別れ霜とは突然に人も又  
行春や園に咲くもの生るるも  
ふと会話途切れ去りゆく春日傘

四月二十七日 目黒学園句会

風光る海光るとき地の揺るる  
君忘るの光るとき地の揺るる  
地の機嫌空の機嫌に菜種梅雨  
潮の香を弾き栄螺の焼き上る  
風光る節電の街過ぎる時

四月二十八日 カトリック新聞選者吟

希望てふ祈り繋げてイースター

# 雑詠 廣太郎 選

空の道幾つあるのか鳥渡る  
 月の名のvari変りて十三夜  
 温め酒とろりと喉をこしにけり  
 畦せばめ狭めて稲の穂の垂るる  
 さびさびて夕日の影を曳く刈田  
 突然の人の変事や身にぞ入む  
 花石路に戻りたちまち石見人  
 これよりはホ句の春秋焔を開く  
 老われに余日とてなき虫時雨  
 丹の橋を小さき鈴の音七五三  
 日溜りの冬菜畑守り御廟守り  
 人の縁続く小春の杞陽忌に  
 我が思ふ故郷は暮の秋の中  
 隼の直視眺裂けるほど  
 空も水も虚ろにしたる琵琶の霧  
 対岸も淡海の国や鯛雲  
 松手入さなかのにほひ浮御堂  
 猪垣を結うて湖辺に住みなせる

我孫子 副島いみ子

同

同

朝倉 井上弘堂

同

福山 竹下陶子

同

同

神戸 山田佳乃

同

同

榎原 稲岡 長

同

同

徳島 岩田公次

同

同

フアゴットに別名ありて文化の日  
 ワーグナー運動会の昂れる  
 コルネットよりやはらかき秋日かな  
 人の世にペンと句帖と秋の風  
 ゆく秋の人の暮しの中を川  
 ゆく秋の人の背ばかり交差点  
 明日早く発つてふ客に後の月  
 冬来る心新たに処す一事  
 神迎ふ祠を灯す京の路地  
 狐火の山をころげて来し話  
 浅草に浅草の鳩冬日向  
 人波をはづれ人見て十二月  
 凧の夜快晴の朝となる  
 青空を連れて一枚散紅葉  
 林立のビルに表情冬霞  
 街騒のまだよそよそし十二月  
 骨格をあらはに銀杏散りにけり  
 眠たくてたまらぬ鴨の脚動く  
 露の世を灯してバースデーケーキ  
 人はまた沖を指差し海の秋  
 生きたとは彩ることや柿紅葉  
 早稲田吼え慶応叫びラガーたり  
 ひとり抜きふたり躲してラガー駆く  
 教へ子のラガーの背丈仰ぎ見る

静岡 松村ふみもと

同

同

熊本 岩岡中正

同

同

京都 安原 葉

同

同

東京 今井千鶴子

同

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

同

東京 橋本くに彦

同

同

渋川 木暮陶句郎

同

同

神戸 藤井啓子

同

同

# 雑詠句 評 (三月号より)

露の世や先日会ひしばかりの詠 京都 安原 葉

最初から私事で申し訳ないが、「先日会ひしばかり」の方々の訃報に、今年は何度も胸を突かれ、言葉を失ったことだろうか。まして、作者は真宗大谷派の要職にあられるのだ。お立場上、どれだけこのような訃報を受けられることか。

その上になお、「先日会ひしばかりの詠」と詠わねばならない悲しみなのだ。まこと儂い露の世なのである。切字「や」の力。

(美奇)

ほんの数日前まではお元気で、一緒に元気に句会等でお会いしていたと思った人の訃報が突如来る。最近はこの事が結構増えてしまっただけではないかと懸念するのが筆者の危惧だけであって欲しいと常々思っているのだが、人の世、というどうしようもない世界を季節が切々と語っている。(廣太郎)

(以下略)

## 松手入音山にゆき海に散り 熱海 嶋田一歩

松に鉄を入れている。鉄の音も、さらさら、こぼれ落ちる葉の音、そのどれもが静かである。

その微かな音が山にゆき、海に散り……。波が寄せては返す浜辺。そんな海辺を見下ろす閑静な邸宅。松の手入の済んで明るくなった庭。

秋の穏やかなひと日が目に浮かぶ好句。(とほ歩)

秋になると各地で見える事が出来る「松手入」であるが、この句から想像出来るロケーションは、山にも海にも近い場所である。職人の鉄の音や、切られた松葉が地上に落ちた時に発するばさっという音が実際聞えてくるようだ。その音の広がりを表現した事により、一種独特の世界が目の前に拡がる。(廣太郎)

# 天地有情

# 江子選

寄宿より戻りて夜学子となれり  
もう迷ふことなき道を行く夜学  
全容の富士に浮びし雲小春  
龍之介いよよ親しき館小春  
吹雪きても止みても住める街美し  
木の葉髪治療明日から抗癌剤  
京都駅初乗の人どつと吐き  
ひるがへりては風花の消えにけり  
秋時雨出がけの用の二つ三つ  
捨舟の浜より冬の立ちにけり  
木枯や江戸の嘶家ひとり逝く  
極月といふ顔をしてその男  
遙か来し寒雁月に声零す  
龍之介の直筆九句冬うらら  
残月を吹き落したる寒波かな  
風呂吹は母愛用の鉄鍋で  
夕日落つ光に浮いて後の月  
渦潮の今こそ盛れ月出づる

東京 稲畑廣太郎  
同  
京都 安原 葉  
同  
熱海 嶋田摩耶子  
同  
樺原 稲岡 長  
同  
熊本 岩岡中正  
同  
東京 今井千鶴子  
同  
神戸 長山あや  
同  
福山 竹下陶子  
同  
徳島 上崎暮潮  
同

大根洗ふ上手も下手もなかりけり  
秋田より小春携へ講師来る  
大阪の未来へ動き出す師走  
鎮魂の二〇一一年暮るる  
火床清め鞆始のもう近し  
夜神楽といひ高千穂の明けるまで  
人生といふ短編に夜の長く  
もの言うて十一月の或る夜更く  
山茶花の咲く毎日のはじまりし  
山茶花の散る毎日の道となる  
凧やよく知る星座幾つある  
時雨忌や濡れて日暮れて旅ごころ  
凧の家居のふつと旅情めく  
凧やとり残されし如く月  
一陣の羽音樹海へ鳥渡る  
隼の速さ脳裏に描きみる  
東尋坊野菊にはこぶ風も秋  
深みゆく秋こもごもに偲ぶ句碑

東京 大久保白村  
同  
奈良 古賀しぐれ  
同  
神戸 後藤立夫  
同  
大阪 蔦 三郎  
同  
熱海 嶋田一步  
同  
東京 河野美奇  
同  
龍ヶ崎 今橋眞理子  
同  
吹田 宮崎 正  
同  
仙台 赤川誓城  
同



# 天地有情句評

汀子

京都駅初乗の人どつと吐き樋原 稲岡 長

元日の京都駅の雑踏。

捨舟の浜より冬の立ちにけり熊本 岩岡中正

放り出されてある捨て舟に冬が始まった。

もう迷ふことなき道を行く夜学東京 稲畑廣太郎

木枯や江戸の噺家ひとり逝く東京 今井千鶴子

受験に至る道程の迷いに終止符。

立川談志の亡くなった日の木枯。

龍之介いよよ親しき館小春京都 安原 葉

遙か来し寒雁月に声零す神戸 長山あや

芥川龍之介の手紙の温もり。

北から越冬に日本へ来た雁の声。

吹雪きても止みても住める街美し熱海 嶋田摩耶子

残月を吹き落したる寒波かな福山 竹下陶子

北海道札幌の摩耶子さん。

残月を吹き落した寒波の夜明け。(以下略)